

| | |
|------------------|---|
| Title | 漱石とスウィンバーン：『薙露行』の「夢」をめぐって |
| Sub Title | Soseki and Swinburne : with reference to The Dream in Kairoko |
| Author | 飛ヶ谷, 美穂子(Higaya, Mihoko) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1992 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.359(88)- 379(68) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 中田美喜教授追悼論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0379 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

漱石とスウィンバーン

——『薙露行』の「夢」をめぐる——

飛ヶ谷美穂子

およそヴィクトリア朝の詩人で、スウィンバーン（Algernon Charles Swinburne, 1837—1909）ほど毀誉褒貶の落差の著しい例はあるまい。若くして天才と謳われ、“オックスブリッジ”の学生たちがこぞってその詩句を高吟したと伝えられるかたわら、余りにも官能的かつ異教的な内容が良識の弾劾的となり、やがて熱狂は潮が引くように静まって、世を去るといつしか忘れられた存在となった。わが国では、ラファディオ・ハーンや上田敏がその熱心な紹介者であった⁽¹⁾。

その一方、東大講師としてハーンの後任であり上田敏の同僚であった夏目漱石は、スウィンバーンに比較的冷淡であったと伝えられる。たとえば教え子の田部重治は、「前ラファエル派の詩人ロゼッティ、スウィンバーンに対する熱も盛んであったが、先生のそうした方面に対する興味は余りなかったように思われた。却って何かの折に、そうした詩に対する軽蔑の口吻さえもあったように覚えている⁽²⁾」と回想する。確かに、英文学における彼の興味の中心が詩よりも小説や戯曲にあったことは、大学での講義内容からものちの作家活動からも、容易に理解できる。

しかしながら、漱石は一世を風靡したこの詩人に決して無関心だったわけではなく、実際には講義にも何度か取り上げていた⁽³⁾。作品中では『草枕』（明治39.9）に、

…スキンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。余が平生から苦にして居た、ミレーのオフエリヤも、かう観察すると大分美しくなる。

（岩波書店昭和41年刊『漱石全集』—以下『全集』と略記— 第二

卷、465-6頁)

という一節がある。

また明治44年には、朝日新聞に寄せた「文藝委員は何をするか」という小文の中で、英王室がスウィンバーンの異才を嘉せず、マイナーポエツトであるオースチンに桂冠詩人の称号を与えたことについて、彼一流の表現で次のように揶揄した。

好悪は人々の随意である。…英国の王家が月桂詩人の称号をスウィンバーンに与へないで、オースチンに年々二三百磅（ポンド）の恩給を贈るのは、単に王家が此詩人に対する好悪表現とみれば夫（それ）迄である。〔『全集』第十一巻、280頁〕

これを裏返せば、漱石はスウィンバーンこそ桂冠詩人にふさわしいと見なしていたのである。彼の「軽蔑の口吻」はむしろ、欧米での流行の尻馬に乗って得々たる周囲の学者や文壇への反発によるものではないかと思われる。

漱石が実は、絵画やデザインなどのラファエル前派芸術に深い関心を寄せていたこと、その投影が、彼の文学、殊に『漾虚集』中の短編や『草枕』等の初期作品に色濃いことは、江藤淳・芳賀徹両氏を初め多くの先学の論考によって、夙に知られるところである。そしてスウィンバーンこそ、その素材・技巧・精神のいずれをとっても、詩の世界におけるラファエル前派運動の体現者にはかならない。

彼は個人的にも、PRB同人ときわめて近い位置にあった。オックスフォード在学中にダンテ・ガブリエル・ロセッティやウィリアム・モリス等とめぐり会うやたちまち親交を深め、バーン＝ジョーンズをして「これまで三人だった仲間が四人になった」と感嘆せしめた⁽⁴⁾。また小説家・詩人のウォッツ＝ダントンは、スウィンバーンの後半生三十年間にわたり、その保護者的存在として起居を共にした人物であるが、彼の小説『エイルウィン』が「ラファエル前派の画を小説にした」と評されるベスト・セラーであり、漱石が刊行直後に熊本まで取り寄せて精細な批評を發表していることは周知のとおりである⁽⁶⁾。

特筆すべきは、かのメレディスが1860年頃彼らときわめて親密だったことで、スウィンバーンはこの世に容れられぬ作家を擁護すべく、『スペクテーター』に論陣を張ったこともある。⁽⁷⁾『坊っちゃん』(明治39.8)の重要な材源の一つであるメレディスの『サンドラ・ペロニ』⁽⁸⁾には、トレーシー・ラングブルックという、小柄で燃えるような赤毛を持つ、名門出身のスキャンダラスな詩人が登場する。この人物のモデルがスウィンバーンであることはよく知られており、漱石も当然承知していたであろう。

つまりスウィンバーンは、メレディスやウォッツ＝ダントンとともに、PRBをとりまく文学サークルの中心人物であり、このような点からも漱石の興味をそそる存在であったに違いないのである。東洋的な道具立ての内にラファエル前派の気分を濃厚に包んだ『草枕』において、ミレー描くオフェリアとともにスウィンバーンの詩が言及されるのは、むしろ自然な連想であった。

『薙露行』(明治38.11)を英訳した高宮利行氏は、英国人学者から、漱石の文体はロセッティやスウィンバーンを思わせるもので、「ラファエロ前派の詩の世界がそこにある」と指摘されたという。⁽⁹⁾また、松村昌家氏は『幻影の盾』(明治38.4)のモチーフの原型を、スウィンバーンの長詩『ライオネスのトリストラム』⁽¹⁰⁾に見出している。英文学者漱石が、ラファエル前派美術に魅かれながら、その周辺文学に目を向けなかったとは考えにくいのである。

本稿は、これまで看過されがちであった漱石とスウィンバーンとの接点を英国留学を中心に探り、その余響のいくばくかを『薙露行』の中に読み取ろうとするものである。

今日漱石山房蔵書目録には、4点のスウィンバーン作品が記されている。⁽¹¹⁾岡三郎氏の調査された漱石の図書購入メモ⁽¹²⁾によれば、目録中の4点はいずれもロンドン留学中の明治34(1901)年に購入されている。購入順に記せば、下の通りである。

◇2月5日

1. *Studies in Prose & Poetry*

(『散文と詩の研究』・評論)

Chatto & Windus, 1894.

◇6月4日

2. *Rosamund, Queen of the Lombards*

(『ロンバルド女王ロザマンド』・劇詩、以下『ロザマンド』と略記)

Chatto & Windus, 1899.

◇7月9日(2点)

3. *Atalanta in Calydon*

(『カリュドンのアタランタ』・劇詩、以下『アタランタ』と略記)

Chatto & Windus, 1899. A New Edition. (初版1865)

4. *Chastelard* (『シャトラール』・劇詩)

Chatto & Windus, 1894. A New Edition. (初版1865)

漱石の日記に徴して、これらはすべて、当時火曜日毎に個人教授を受けていたシェークスピア学者ウィリアム・クレイグ (William James Craig, 1843—1906) 宅からの帰途、需めたものであることが判る。日記にはそれぞれ

二月五日 火 Craig氏ニ至ル ...

帰途 *Don Quixote* Wartonノ *History* 等ヲ買フ 代価四十円程ナリ 頗ル愉快

六月四日 火 Craig氏ニ至ル

George Winterニテ古本ヲ買 9円許ナリ

七月九日 火 Craig氏ニ至ル ...

Holbornニテ Swinburne 及 Morrisヲ買フ

(『全集』第十三卷39—40頁、66頁及び71頁)

と記されている。これに限らず、書籍の購入は火曜日に集中しているが、外出のついでというばかりでなく、クレイグから受けた文学的の刺激や興奮

が、彼の足を書店に向けさせたのであろう。

ここで思い出されるのは、『永日小品』中の好篇「クレイグ先生」（明治42.3）一暖かい筆致で、このアイルランド人老学究の面影を愛惜した、忘れがたい留学中の寸描である。そこには、次のような件りがある。

先生の得意なのは詩であつた。…いつかスキンバーンのロザモンドとか云ふものを持つて行つたら、先生一寸見せ玉へと云つて、二三行朗読したが、忽ち書物を膝の上に伏せて、鼻眼鏡をわざわざはづして、あゝ駄目々々スキンバーンも、こんな詩を書く様に老い込んだかなあと云つて嘆息された。自分がスキンバーンの傑作アタランタを読んで見様と思ひ出したのは此の時である。（『全集』第八巻、139頁）

購入メモや日記を参照しつつ読むと、この回想は一層興味深い。『ロザモンド』と『アタランタ』の購入日から、この記事が明治34年6月11日から7月9日までのいずれかの火曜日のことであるのは、容易に推定できる。クレイグの言葉から『アタランタ』を読もうと思ひ立ち、それをすぐに実行に移した漱石の心の動きまでが、感じ取れるようである。

留学当初、漱石はスウィンバーンに興味はあっても、何から読むべきか判然しなかったようだ。とりあえず評論と詩のそれぞれの分野で最新作に眼を通すという意味で、『詩と散文の研究』と『ロザモンド』を購入したのであろう。といつても『ロザモンド』は発表から2年近く、『詩と散文の研究』に至っては7年も経っており、しかも決して代表作とはいえない。この時スウィンバーン六十四才、クレイグの慨嘆通り、筆の衰えは覆い得なかった。

ともあれ、これが漱石のスウィンバーンとの出会いであつた。『詩と散文の研究』は、購入翌日から早速読み始めたらしく、漱石旧蔵本の扉に「K. Natsume / Feb. 6, 1901」と日付入りの署名がある。これといった書き入れは見られないが、唯一の傍線がウィルキー・コリンズの項（116頁）にあるのは、漱石がコリンズの『白衣の女』を読み、自らものに推理小説的手法を用いたことを考え併せると、なかなか面白い。

一方『ロザモンド』には、鉛筆による英文書き入れ（後述）や下線・傍

線にまじって、4箇所に青鉛筆の傍線があり、そこに紙片が挟み込まれている。あるいは「質問を受けて呉れる先生」⁽¹³⁾クレイグへの質問箇所だったのではないかと想像される。漱石の中には、いくら先生でもスウィンバーンの最新作までは読んでいないだろうというような、やや挑戦的な気分も混じていたかも知れない。その『ロザモンド』を何気なく示した漱石を驚かせたのは、回想にあるごとく、スウィンバーンに対するクレイグの思い入れの深さであった。

思うに、スウィンバーンが『アタランタ』『詩とバラード・第一集』等の代表作を矢継ぎ早に世に問うていた1865—66年頃、6才年少のクレイグは二十を出たばかりの青年だった。まさにその詩句に熱狂した学生の一人だったのである。また壮年期のスウィンバーンはシェークスピア研究に取り組み、1880年には1冊の研究書 (*A Study of Shakespeare*) にまとめ、また「ヘンリー八世」の制作年代をめぐって、中世英文学者ファーニヴァルとの間に大論争を繰り広げたりもした。シェークスピア研究に生涯をかけたクレイグには、これも忘れられない出来事だったにちがいない。つまりクレイグはあらゆる意味でスウィンバーンと同時代を生きたのであり、彼の絶頂期を知るだけに、『ロザモンド』でのその筆の衰えに自らの老いを重ね合わせて、思わず「嘆息」したのである。

しかし、漱石が彼から聞き取ったのは「嘆息」だけではなかった。たとえば約三ヶ月後の9月13日、漱石がファーニヴァルを訪ねることになる一つの契機を、ここに想像することも可能である。だが、資料はより具体的に、漱石がクレイグから学んだ内容を物語っている。

まず、『ロザモンド』の11頁と21頁には、鉛筆書きの丁寧な書体で、それぞれ次のような書き入れがみられる。

〈資料 1〉

- p.11 whose happier hand (下線)
“By whose happier hand?” (*Atalanta*) (書入れ)
- p.21 「Sirs, good night — if night may be good」 (「」)
“Good night? the night is never good” Shelley (書入れ)

いずれも、『ロザマンド』の詩句がそれぞれ『アタランタ』およびシェリーの詩を踏まえていることを示す注である。漱石が「傑作アタランタを読んで見様と思」ったきっかけがクレイグの言葉にあったことは、容易に想像されるが、シェリーもまた、クレイグの十八番であった。「先生の得意なのは詩であつた」に始まる『永日小品』のユーモラスな一節からもその片鱗が窺えるし、漱石の日記にも、シェリーの研究書をクレイグから借りた旨の記事が二度見られる。⁽¹⁵⁾ 上記の注も詩に通曉していたクレイグの教示によるものと思われ、その博引旁証ぶりが偲ばれる。

また、この本には遊び紙と扉との間に広告頁があるが、そこに掲載されたスウィンバーン作品リスト30タイトルのうち、8作品のタイトルの頭に、「+」や「-」の印が、やはり鉛筆書きで付けられている。それらを一覽の順に抜き出し、発表年代を付して示せば下の通りである。

〈資料 2〉

+ *Atalanta in Calydon* (『アタランタ』・劇詩1865)

+ *Chastelard* (『シャトラール』・劇詩1865)

+ *Poems and Ballads. First Series*

(『詩とバラード・第一集』・詩集1866)

- *Poems and Ballads. Second Series*

(『詩とバラード・第二集』・詩集1878)

+ *Songs before Sunrise* (『日の出前の歌』・詩集1871)

- *Bothwell* (『ボスウェル』・劇詩1874)

- *Erectheus* (『エレクテウス』・劇詩1876)

- *Mary Stuart* (『メアリ・ステュアート』・劇詩1881)

おそらく『ロザマンド』に失望したクレイグが、スウィンバーンの真価を示す代表作を挙げ、漱石はその場でリストに印を付けたのであろう。とりわけ「+」印の4作は、スウィンバーンが天才の名をほしいままにした若き日の傑作であり、クレイグの思い入れもひとしおで、強く推奨したものと思われる。また「-」印の4作も、やや年代は下るが、第一集と共に評価の高い『詩とバラード・第二集』や、『シャトラール』と共に所謂“メ

アリ・ステュアート三部作”を成す『ボスウェル』と『メアリ・ステュアート』など、「+」印との一貫性が感じられる。

このうち『アタランタ』『シャトラール』の2作がただちに購入されたことは、前述のとおりである。漱石旧蔵本を見ると、『シャトラール』はフランス語の台詞の箇所に紙片を挟んでいる程度だが、『アタランタ』は約20ヶ所に下線・傍線や英文の書き入れなど、研究の跡が見える。

さらに漱石は、印を付けた項目のうち詩集である3巻について、それぞれの主要作品リストを作っていた。『文学論ノート』としてまとめられた留学中の膨大な筆記の中の、「Swinburne」と題する一葉がそれである（村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』岩波書店・昭51、402—3頁。以下、村岡氏に従ってこのリストを「作品表」と呼ぶ）。『詩とバラード・第一集』から13篇、『日の出前の歌』から7篇、『詩とバラード・第二集』から8篇を撰んでそのタイトルを列記したもので、いくつかには○印や注が施されている。内容からも形からも、明らかに〈資料2〉を補足する性質のメモであり、漱石がこれらの詩集にも強い関心を抱いたことを示している。

『文学論ノート』には、他にも5ヶ所にスウィンバーンについての言及がある（前掲書189, 230, 233, 326, 340の各頁）。「F. t ideal.」と題した項には、「ugly, painful (F + f)」の見出しのもとに、『詩とバラード・第二集』中の一編‘Ave atque Vale’の第4連を6行にわたって書き写したメモが残っている（同189頁）。『詩とバラード・第一集』からも、「Love」の項に‘Les Noyades’と‘Anactoria’、「Taste, Custom etc.」の項に‘Dolores’の、3篇のタイトルが見られる（同230頁及び326頁）。上述「作品表」に入っていない‘Ave atque Vale’や‘Anactoria’をも含め、漱石がこれらの詩集を通読していた証左といえよう。ひととおり眼を通しただけでなく、自己の文学論に有機的に取り込めるまでに、読みこなしていたことが窺えるのである。

『詩とバラード・第一集』についてはもう一つ、意外なところに興味深いメモが発見できた。同じ年の3月5日購入したマシュー・アーノルド詩集（*Selected Poems of Matthew Arnold*, Macmillan & Co., 1900）であ

る。かなり精読したと見えて、40ヶ所以上に下線・傍線や書き入れがある。この詩集の見返しに、青鉛筆の走り書きがあり、文字が消えかかって読みにくいが、次のように判読できる（下線部分は筆者が適宜補った）。

〈資料 3〉

| | |
|-------------------------------------|------------|
| Hymn to <u>Proserpine</u> | 76 |
| A Litany | 102 |
| A Match | 119 |
| <u>A song in</u> Time of Revolution | 161 |
| <u>To Victor</u> Hugo | 167 |
| Dolores | <u>178</u> |
| Hesperia | 200 |
| Dedication | 341 |
| Madonna Mia | 317 |
| The Sea-Swallows | 334 |

これらは『詩とバラード・第一集』の主要作品及びその収録頁のメモであり、若干の異同はあるものの、作品名の多くが配列を含め『文学論ノート』の「作品表」と一致する。いかにも手近な本の見返しに走り書きしたという感じであり、「作品表」はこのメモなどをもとに、改めて作成されたものと思われる。しかしこのメモには、「作品表」にはない収録頁が記されているので、これを基に漱石の読んだ版の推定が可能である。

ここで参考までに、『詩とバラード・第一集』出版の経緯に触れておきたい。この詩集は『アタランタ』及び『シャトラール』の好評に勢いを得たスウィンバーンが、数年にわたって書きためていた詩をまとめたものであるが、その余りにも官能的かつ反キリスト的な内容に、周囲には当初から反響を危惧する声が強かった。1866年7月、書肆モクソンMoxonは見本刷りを数名の批評家に送ったが、案の定轟々たる非難を浴びたため、発売前に書店から回収してしまった。幸いリットン卿の肩入れでホッテンHottenが残部を引き取り、同年9月に表紙をつけ変えてそのまま刊行するに至って、この詩集は日の目を見た。つまり両者は実質的に全く同一の版

であり、ここではこのモクソン=ホッテン版を初版と呼ぶことにする。

またスウィンバーンはのちに書肆をチャトゥ&ウィンドスChatto & Windus一社に限定したが、この詩集も1878年のNew Edition以降数版を同社から出している。

筆者の管見に入ったのは、初版 (Hotten's reissue) 及びNew Editionを含む3種のチャトゥ&ウィンドス版である。この中で漱石のメモと頁数の合致するのは、初版のみであった。しかも、目次で比較すると'Hymn to Proserpine'と'To Victor Hugo'の二作に1頁のずれがあるのだが、実際に初版をひらいてみると、この2篇のタイトル頁(77頁及び166頁)には頁数が印刷されておらず、見開き隣の頁の数字(76頁及び167頁)を写したものと知れる。漱石は『詩とバラード・第一集』を初版で読み、その頁を繙きながらメモを取ったのである。

『アタランタ』等は入手し易いチャトゥ&ウィンドス版を購入して読んだのに対して、『詩とバラード』は30年以上前の初版で読んでおり、購入した形跡も図書館へ通った様子もない。そうになると、クレイグの蔵書を借りて読んだと考えるのが最も自然である。シュリーの研究書を借りたという日記の記事なども考え併せると、蓋然性はかなり高いといえよう。

『詩とバラード・第一集』に関連して、もう一つ注目すべきメモがある。「作品表」冒頭の、次のような注である。

Poems & Ballads vol. 1 .

Laus Veneris cf. W^m Morris' *The Hill of Venus*

The Earthly Paradise vol IV

(『詩とバラード・第一集』)

「ヴィナス頌」

参照：ウィリアム・モリス「ヴィナスの丘」

『地上の楽園』第4巻 所収)

「ヴィナス頌」は、『詩とバラード・第一集』の中でもとりわけ物議を醸した長詩で、タンホイザー伝説を題材としている。女神ヴィナスとの愛欲に溺れた騎士タンホイザーの魂の遍歴を描くこの物語は、当時ワグナーの

楽劇『タンホイザー』が火付け役となって流行の兆しにあり、アーサー王伝説と並んで芸術家たちの好んで取り上げる素材であった。漱石は明治38年5月に談話「批評家の立場」の中でこの楽劇にふれており（『全集』第十六巻449頁）、留学当時もある程度の知識は有していたものと思われる。

しかしスウィンバーンのこの詩は、清純な乙女エリーザベットの献身や、クライマックスともいうべき神の恩寵による奇蹟には触れることなく、ヴィナスの虜になった騎士の独白の形で、ひたすらこの異教の女神の官能的魅力を讃え、ヴィナスを聖母マリアよりも美しいとまでうたった。これには当然烈しい反発と非難の声が挙がったが、その一方、これに唱和するような芸術作品もラファエル前派を中心に次々と生まれた。⁽¹⁶⁾モリス『地上の楽園』に収められた物語詩「ヴィナスの丘」（1870）もその一つであり、上記の注はこれを参照せよとの意味である。

やはり『文学論ノート』の中に、「Supernatural」と題して超自然的な内容を扱った文学作品を列挙したメモがあるが、そこに

○ Morris & Swinburne—staffカラ花が咲ク嘶（前掲書、233頁）とあるのも、タンホイザーが臨終の際にその罪を悔悟すると、神の恩寵の証しとして杖から花が咲いたという奇蹟への言及で、明らかに「ヴィナスの丘」と「ヴィナス頌」の二作を指すものである。（但し、さきに述べたとおり「ヴィナス頌」にはこの奇蹟の場面はない。）ちなみに、この項の直前には『アタランタ』、直後にはかの『エイルウィン』が挙げられ、その他ブレイク、コールリッジ、シェリー、キーツ、さらに『マクベス』、『ハムレット』、『ラマームアの花嫁』（スコット）、『シャーロットの女』（テニスン）等の作家・作品名が並び、漱石の興味のありようを暗示している。

さて、スウィンバーンとモリスという組合せからただちに想起されるのは、7月9日の日記の「Swinburne及Morrisヲ買フ」という記述である。図書購入メモによって確認すると、この日需められた書日は3冊—スウィンバーンの『アタランタ』と『シャトラール』、及びモリスの『地上の楽園』であった。『地上の楽園』購入の直接の動機が、「ヴィナスの丘」を「ヴィナス頌」と参照することにあつたのは、既に明らかであろう。ここにもク

レイグの関与があったこと、即ち漱石に『詩とバラード』の初版を貸与し、モリスを参照するよう教示したのが彼であろうことは、想像に難くない。

結局、漱石は『ロザモンド』に「嘆息」したクレイグの口から、スウィンバーンの代表作を聞いてその場で印を付け、詩集についてはそれぞれの主な収録作品のリストを作り、さらには参照すべきモリスやシェリーの作品を書き取り、早速その中の数篇を買い求め、または借りるなどして、書き入れやメモをしながら熟読した、ということになる。そこには『永日小品』のほのぼのとした追憶の背後にあった、クレイグの影響力の大きさと漱石の並々ならぬ気迫とが浮かび上がって来る。

クレイグは学者としては独立独行の人であったが、決して狷介孤高の老大家ではなく、その人となりはむしろ天真爛漫で、所属していたサベージ・クラブでも人気者だったという。⁽¹⁷⁾ サベージ・クラブには当時、『ミカド』で知られるギルバートや、一代の名優サー・ヘンリー・アーヴィングをはじめ、文学・演劇・ジャーナリズム・美術等、各界の名士・文化人が名を連ねていた。⁽¹⁸⁾ また一方、ロセッティ兄妹の次兄でラファエル前派運動を側面から支えた評論家ウィリアム・マイケル・ロセッティなども、シェリー協会を通じてクレイグには近い存在だったのである。⁽¹⁹⁾

そして漱石も、火曜日毎に聞くクレイグの「文学上の座談」から、ロマン派やラファエル前派の芸術、さらには英文壇や演劇界の同時代の風を、身近に感じとることができたにちがいない。それは、彼が自覚していた以上に意味深い時間だったのではあるまいか。

留学中の漱石に、スウィンバーンと真剣に取り組んだ一時期があったことは、疑いないようだ。では、のちの作家・漱石の作品に、その痕跡を見出すことはできないだろうか。詩と小説というジャンルの違いもあり、プロットや人物を対置するような形での比較は難しい。しかし、もともと英文学における「詩」とは、韻文で綴られたものがたりであり、小説との隔たりは存外小さい。殊に、漱石はストーリーテリングの巧みさの反面、詩

的・絵画的な情景の点綴にもすぐれていたし、スウィンバーンの詩はギリシア・ラテンあるいは中世ヨーロッパの神話・伝説に取材し、劇的な構成を備えた長大な作品が多いから、両者を共通の視点で捉えることも充分可能である。

この問題については稿を改めて論ずるつもりだが、ここでは漱石作品中のイメージにスウィンバーンの詩が投影していると思われる一つの例を取り上げたい。その作品とは、『薙露行』である。

『薙露行』はいうまでもなく、アーサー王伝説に取材した漱石初期の短篇である。早くから多くの研究者によって源泉研究が行われ、典拠とされるマロリーの『アーサーの死』やテニソンの『国王牧歌』及び『シャロットの女』などとの詳細な比較がなされてきた。だがその一方、この作品の持つ濃密な雰囲気、マロリーやテニソンよりむしろラファエル前派に近いというより、ほとんどラファエル前派そのものであることも、また多くの論者の一致して認めるところである。四六駢儷体と雅文をこきまぜたような、華麗で擬古的な文体の効果もあろうが、それ以上に情景を描出する色彩やイメージそのものが、しばしばラファエル前派絵画を思わせるのである。

殊に印象的なのは、「(一) 夢」でギニヴィアがランスロットに次のように語る、夢の挿話である。

「薔薇咲く日なり。白き薔薇と、赤き薔薇と、黄なる薔薇の間に臥したるは君とわれのみ。楽しき日は落ちて、楽しき夕暮の薄明りの、尽くる限りはあらじと思ふ。その時に戴けるは此冠なり」と指を挙げて眉間をさす。冠の底を二重にめぐる一正の蛇は黄金の鱗を細かに身に刻んで、拾げたる頭には青玉の眼を嵌めてある。

「わが冠の肉に喰い入る許り焼けて、頭の上に衣擦る如き音を聞くとき、此黄金の蛇はわが髪を繞りて動き出す。頭は君の方へ、尾はわが胸のあたりに。波の如くに延びるよと見る間に、君とわれは腥さき縄にて、断つべくもあらぬ迄に纏はるゝ。中四尺を隔てゝ近寄るに力なく、離るゝに術なし。たとひ忌はしき絆なりとも、此縄の切れて二

人離れ々々に居らんよりはとは、其時苦しきわが胸の奥なる心遣りなりき。噛まるゝとも螫さるゝとも、口繩の朽ち果つる迄斯くてあらんと思ひ定めたるに、あら悲し。薔薇の花の紅なるが、めらめらと燃え出して、繋げる蛇を焼かんとす。しばらくして君とわれの間にあまれる一尋余りは、真中より青き烟を吐いて金の鱗の色変り行くと思へば、あやしき臭ひを立てゝふすと切れたり。身も魂もこれ限り消えて失せよと念ずる耳元に、何者かからからと笑ふ声して夢は醒めたり。醒めたるあとにも猶耳を襲ふ声はありて、今聞ける君が笑も、宵の名残かと骨を撼がす」と落ち付かぬ眼を長き睫の裏に隠してランスロットの気色を窺ふ。

（『全集』第二巻、145—46頁。下線筆者）

この件りはまた、『薤露行』中で典拠が特定されていない殆ど唯一の箇所でもある。色とりどりの薔薇の中に臥す王妃と騎士、王妃の冠に刻まれた蛇の黄金の鱗と青玉の眼、蛇に身をつながれた恋人たちと、そのまわりで燃え上がる紅の薔薇、青い烟とあやしい臭い—きわめて具象的・絵画的なモチーフが綴られているにも関わらず、これに直接照応するような情景は、テニスンやマロリーの詩には勿論、ラファエル前派美術の中にも、未だ見出されていないのである。⁽²⁰⁾

ところが、スウィンバーンの『詩とバラード・第一集』の頁を繙くと、いたるところにこれに類したイメージがあふれていることに驚かされる。すなわち、花・冠・蛇・炎・烟などのモチーフが、赤と金を中心とした強烈な色彩を伴って、随所に描き出されているのである。これが良くも悪しくもスウィンバーンの特異性と見られていたことは、同時代評に徴しても知られる。

たとえば、スウィンバーン攻撃の最先鋒となったジョン・モーリーは、いちちやく『サタデー・レビュー』誌に匿名批評を掲載し、「刺すだの噛むだの、“しなやかにして淫らなる胸の痛み”だの、蛇と火だの、血と酒と汐水だの、香料と毒と灰だのの話が、むかつくばかり重く五感にのしかか⁽²¹⁾る」と言い、「極彩色と陶酔しきった観念やイメージとを惜しげもなく用

いるのが、スウィンバーン氏の特徴の最たるものである」⁽²²⁾と結論づけた。

これに対し、スウィンバーン擁護の立場から筆を執ったウィリアム・マイケル・ロセッティも、「一定の単語・言い回し・イメージが頻繁かつ継続的に繰り返される」⁽²³⁾ことは認めていた。彼はスウィンバーンの作品中の、火・接吻・酒・花・血などの言葉について、炎・胸・刺す・噛む・赤・真紅・暗い・熱いなどの縁語も含め、使用頻度の統計を取ったら面白いだろうと述べている。⁽²⁴⁾

こういった傾向は、『詩とバラード・第一集』全巻をほぼ貫くもので、ジョン・モーリーが引用した「ドローレス」(‘Dolores’)などに特に顕著である。

そして、ひととき「夢」に近い印象を与えるのが、漱石も注目していたと見られるかの問題作、「ヴィナス頌」(‘Laus Veneris’)なのである。106連424行に及ぶいささか冗漫なこの長詩のすべてをここで紹介することは出来ないが、比較的語句の照応などのわかりやすい箇所をいくつか抜粋してみよう。「夢」本文、殊に下線部と対比して頂きたい。テキストは『詩とバラード・第一集』初版により、拙訳を付した。括弧内の数字は連(stanza)を示す。

… but as the souls that were
Slain in the old time, having found her fair;
Who, sleeping with her lips upon their eyes,
Heard sudden serpents hiss across her hair (29)

… そのかみ 彼女の色香を知って
屠られし者たちのごとく。唇に眼をふさがれて
まどろんでいたかれらは やにわに耳にしたのだ
女の髪ごしに しゅうしゅうという蛇を

Her little chambers drip with flower-like red,
Her girdles, and the chaplets of her head,
Her armlets and her anklets; … (31)

つぼねつぼねは 花のような朱に滴る
飾り帯も 頭に戴く花冠も
腕輪や足輪も ことごとく …

Her gateways smoke with fume of flowers and fires,
With loves burnt out and unassuaged desires; (32)

戸口ごとに 花と火の匂いがたちこめ
燃え尽きた愛と 満たされぬ欲望が烟る

The queen whose face was worth the world to kiss,
Wearing at breast a suckling snake of gold; (50)

くちづけひとつに 世を傾けしめたかの女王の
胸にまつわり吸いつく黄金の蛇

… the edged light slips,
Most like a snake that takes short breath and dips
Sharp from the beautifully bending head,
With all its gracious body lithe as lips
That curl in touching you; right in this wise
My sword doth, seeming fire in mine eyes,
Leaving all colours in them brown and red
And flecked with death; then the keen breaths like sighs,

The caught-up choked dry laughter following them, (55—57)

… 刃の光の すべりゆくさまは
あたかも蛇が 短く息を吸い
なよやかに垂れた鎌首から するすると
優美な全身を伸ばすごとく 蛇体のしなやかさは
御身に触れてめくれ上がる唇に似て。 まさに斯く
わが剣も まるで炎のように

眼に映る限りの彩りを 茶と赤に変え
死がそれを斑らに染める。 それに続くのは
吐息のような荒い息遣いと 押し殺した空笑い

Ah, with blind lips I felt for you, and found
About my neck your hands and hair enwound,
The hands that stifle and the hair that stings,
I felt them fasten sharply without sound.

Yea, for my sin I had great store of bliss
Rise up, make answer for me, let thy kiss
Seal my lips hard from speaking of my sin,
Lest one go mad to hear how sweet it is.

(80—81)

眼を閉じて 御身に唇を這わせれば
私のうなじに 手と髪が巻きついて
手は息を止め 髪は突き刺さり
すみやかに音もなく この身を締めつける

私は罪ゆえに 大いなる至福を得たのだ
されば起ち上って応えよ 御身のくちづけもて
私の唇を塞ぎ わが罪を語らせ給うな
あまりの甘美さに 聞く者が心狂わぬように

And I forgot fear and all weary things,
All ended prayers and perished thanksgivings,
Feeling her face with all her eager hair
Cleave to me, clinging as a fire that clings
To the body and to the raiment, burning them;
As after death I know that such-like flame
Shall cling to me for ever; yea, what I care,

恐れもあらゆる煩いも 私は忘れた
 祈りは絶え果て 神への感謝は潰えた
 頬を寄せれば しきりにその髪が
 絡みついて私を離さない まるで炎が

体と衣にまといつき 焼き尽くすように
 死後もおそらく永劫に かかる炎が私を
 包んで離すまい だが死んで焼かれるとて
 何を恐れよう この現し身も灼かれる思いなれば

この詩には、固有名詞はほとんど表われず、背景である伝説もさして重要視されていない。読者に提示されるのはただ、騎士と女神との背徳の恋であり、破滅の予感と罪の甘美さのもたらす至福である。女神を王妃に置き換えれば、「夢」にはほぼ重なる内容と言える。具体的に描き出される情景を比較しても、抱擁のさなか女の頭からうごめき出す蛇、恋人たちの身に迫る炎、たちこめる煙と花の匂い—など、鮮やかな色彩とイメージの類似は著しい。

殊に注目し値するのは、「髪を繞りて動き出す」蛇の「衣擦る如き音」と“sudden serpents hiss across her hair”や、あとに響く「耳元に、何者かからからと笑ふ声」と“the caught-up choked dry laughters following them”などの、印象的な聴覚表現の一致である。音楽性をもって知られるスウィンバーンの、頭韻をきかせた独特の響きまでが、たくみに日本語のリズムに移しとられているようである。

このように、「ヴィナス頌」における視覚的・聴覚的イメージが漱石の中に刻み込まれ、『薙露行』の「夢」に投影し結実していると思われるのである。

『薙露行』において、漱石が材源としたのは第一にテニスンであり、次にはマロリーであったことは疑いを容れない。だがその上で、ラファエル前派風意匠を凝らした独自のアーサー王物語を創り上げようとした時、留

学中に読んだスウィンバーンの印象が、罪こそ至福と謳い上げた「ヴィナス頌」の詩句が、よみがえってきたのではあるまいか。

それにしても、スウィンバーンから抽出したイメージをギニヴィアに「夢」として語らせるという着想は、全く見事という他ない。「ヴィナス頌」の全篇を通読すればいささか鼻につく、末期錦絵のような極彩色のイメージも退廃や倒錯の匂いも、「夢」のエピソードに凝縮して封じ込め、テニスの「優麗都雅」とマロリーの「簡浄素樸」⁽²⁵⁾の間にしのばせれば、むしろまたとないアクセントとなって彩りと香りを添えるのである。

テニスの隠し味にスウィンバーンを用いるという力技を可能にしたのは、漱石生来のすぐれたバランス感覚と文学的直感であるが、彼がスウィンバーンに眼をひらいたきっかけがクレイグの「嘆息」であったことを思うと、不思議な感慨に打たれずにはいられない。

ロンドンで『詩とバラード・第一集』の初版を手にしてから約4年、『薔露行』執筆に際して再び眼を通す機会があったか否かは定かではないが、スウィンバーンの詩的イメージを自分自身の言葉で紡ぎかえすには、むしろこの歳月が必要であったのかも知れない。漱石はその英国体験を、漸く文学として表現し始めていた。

漱石がクレイグの訃報に接したのは、『薔露行』発表のほぼ一年後のことである。

註

- (1) ハーン『詩の鑑賞』第4章「スウィンバーン研究」(明治31—32年の講義をまとめたもの。恒文社昭和58年刊『ラフカディオ・ハーン著作集』第八巻176—238頁)、上田敏「近英の三詩伯」「現代の英国詩歌」(教育出版センター昭和53年刊『定本上田敏全集』第三巻所収。初出はそれぞれ、『江湖文学』明治29.11及び『帝国文学』明治30.3)など。
- (2) 「漱石先生の授業ぶり」、『英語青年』1954.8。
- (3) 『文學論』第二編第二章(『全集』第九巻141頁)、同第三編第一章(同176—77頁)、『文學評論』第五編(『全集』第十巻349頁)、『英文學形式論』Ⅱ(『全集』第十六巻350頁)に、それぞれスウィンバーンについて言及がある。

- (4) …Burne-Jones exclaimed, “We have hitherto been three, and now we are four of us.” — Edmund Gosse, *The Life of A. C. Swinburne* (Macmillan & Co., 1917), p. 93.
- (5) 戸川秋骨、世界名作大観『エイルキン物語』（国民文庫刊行会・大14）序文参照。
- (6) 「小説『エイルキン』の批評」、『ホトトギス』明治32.8。『全集』第十二巻所収。
- (7) Letter to the Editor, *Spectator* 7 July 1862.
- (8) 拙稿『『サンドラ・ペロニ』と漱石』（『英語青年』1987. 2—3）参照。
- (9) 「中世英文学と漱石」、『国文学』・昭58.11。
- (10) 『幻影の盾』における英文学的諸要素、『明治文学とヴィクトリア時代』（山口書店・昭56）98—102頁。
- (11) 勿論、蔵書目録が漱石の読んだ本のすべてではない。たとえば『文學論』には、スウィンバーンの『ウィリアム・ブレイク論』（*William Blake, a Critical Essay*）からの引用がある（『全集』第9巻、241—2頁）が、この評論は蔵書目録に含まれていない。
- (12) 岡三郎「イギリス留学前半の漱石のこころの明暗」、『夏目漱石研究』第一巻202～212頁、国文社・昭56。
- (13) 『全集』第八巻137頁。
- (14) 明治34年9月13日の日記に、「Dr. Furnivallニ遇フ、元氣ナ爺サンナリ」（『全集』第十三巻80頁）とある。ファーニヴァルについては、高宮利行「漱石と三人の中世英文学者」（『慶応義塾大学言語文化研究所紀要第14号』昭57.12）参照。
- (15) 明治34年2月26日の日記に「Craig氏ニ至ルShelley SocietyノPublicationヲ二冊借リテ還ル」、同3月5日には「Craig氏ニ至リ…Shelley SocietyノPublicationノ内W. Rossettiノ*A Study of Prometheus Unbound*ヲ借リテ帰ル」（『全集』第十三巻、44—45頁）とある。なお、漱石は同8月20日にシェリー協会のもを含めシェリー関係の書籍を5点まとめて購入しているが、これもおそらくクレイグの影響であろう。
- (16) スウィンバーンがこの詩集を捧げた画家バーン＝ジョーンズにも、同題の油彩（1878）がある。彼はまた、モリスの詩にも木版挿画を制作している。
- (17) クレイグの人物像に関しては、平川祐弘「クレイグ先生と藤野先生」、『夏目漱石 非西洋の苦闘』（新潮社・昭51）に詳しい。
- (18) サベージ・クラブは、文学・芸術に携わる紳士を会員として1857年に設立され、18世紀に数奇な一生を送った詩人リチャード・サベージに因んで命名された。1889年以後アデルフィ・テラス6～7番地を所在地に定め、ジャーナリスト・音楽家・科学者にも枠を広げ、時の皇太子（のちのエドワード7世）

を含め500人の会員を擁した。Percy W. Bradshaw, 'Brother Savages and Guests' - *A History of the Savage Club 1857—1957* (W. H. Allen & Co., 1958) 参照。

- (19) 漱石がクレイグから借りたシェリー研究書の中にも、W. M.ロセッティの著書が含まれている。註(15)参照。漱石は他に、W. M.ロセッティによるシェリーの評伝 (*A Memoir of Shelley. Shelley Society's Publication 1st Series No. 2.* London: Reeves & Turner, 1886) も入手している。
- (20) 『薙露行』の材源研究の嚆矢たる阪田勝三氏の『『薙露行』とその素材』(『文学』昭17. 12) は、この「夢」を「全く漱石の創作」としており、これに従う説が多い。江藤淳氏は、ダンテ『神曲—地獄篇・第五歌』にあるパオロとフランチェスカの挿話を材源と推定し、「禁忌を破って恋に耽溺した恋人たちが、罰せられて離れられなくなってしまう」という共通点をその根拠としている。『漱石とアーサー王伝説』(前掲) 280—81頁参照。また松村昌家氏は、『国王牧歌』中の蛇や花園の虫の寓意に注目し、蛇はギニヴィアとランスロットの周辺に潜伏しているモードレットのメタファーであるとする。『『薙露行』の英文学的背景』、『明治文学とヴィクトリア時代』(前掲) 123—30頁参照。
- (21) This stinging and biting, all these 'lithe lascivious regrets', all this talk of snakes and fire, of blood and wine and brine, of perfumes and poisons and ashes, grows sickly and oppressive on the senses. — Unsigned review by John Morley in *Saturday Review*, 4 August 1886. Clyde K Hyder ed., *Swinburne : The Critical Heritage* (RKP, 1970) p. 25.
- (22) Unsparing use of the most violent colours and the most intoxicated ideas and images is Mr.Swinburne's prime characteristic. — *Ibid.*, p. 26.
- (23) …the frequent, and indeed continual, iteration of certain words, phrases, and images. — W. M. Rossetti, *Swinburne's Poems and Ballads* (1866). *Swinburne : The Critical Heritage*, p. 83.
- (24) …Curious statics might be compiled, out of Mr.Swinburne's four volumes, of the number of recurrences of the idea of fire, … etc. — *Ibid.*, p. 83.
- (25) 『薙露行』前文(『全集』第二巻141頁) 参照。

付記：本稿は平成三年度日本比較文学会東北支部大会(1991.12. 7、於東北大学)における同題の口頭発表と同趣旨である。なお、漱石文庫の閲覧にご高配頂いた東北大学図書館、並びに『詩とバラード』(New Edition, Chatto & Windus, 1903)等貴重な蔵書を快くご恵与下さった慶応大学高宮利行教授に、心からお礼申し上げます。